

九条家薫物書について―松寿文庫『薫物相伝次第』とその周辺―

矢野 環

薫物は三条家を始めとする公家の家々において伝承されてきた。ここで紹介するのは五撰家の九条家における薫物伝書（松寿文庫蔵）であり、江戸初期の当主九条幸家も関与したものである。特に、成巻された『薫物相伝次第』は九条幸家の伝書であるが、そのみでなく、その編纂材料となった草稿類が確認できることが貴重である。さらに正親町院伝来の伝書をもつ伝書の伝来も記載されている。

はじめに

日本の香の文化は、薫物と沈香の二つの柱がある。特に薫物は源氏物語などの古典文学と関わりが深く、沈香を主体とする香道とはまた別途に研究されてきた。特に田中圭子氏によって多くの翻刻と様々な研究・整理が行われた¹⁾。ここでは九条家関連の史料を紹介する。

翻刻写本

今回紹介するのは、五撰家の九条家旧蔵の薫物資料4件であり、九条幸家が編纂したと判断される巻物もある。これらは香老舗松栄堂の松寿文庫に蔵されるものであり、翻刻の許可を頂いたことに感謝申し上げます。

る。

ここで取り上げるのは次の4件である。(n*)は松寿文庫登録番号。

- 1 薫物相伝次第 一巻⁽ⁿ²⁵⁸⁾。直書の外題上部に「九條」の朱角陽印あり。さらに、末尾奥書からすこし後ろにも同印がある。九条幸家から新庄越前守への、寛永八年八月の奥書がある²⁾。
- 2 薫物書 一巻⁽ⁿ²⁵⁷⁾。黄色の用紙。冒頭に「九條」印あり。
- 3 薫物草稿1 一巻⁽ⁿ²⁵⁹⁾。不定長の24紙を継ぐ。第3紙に1, 2と同じ「九條」印がある。
- 4 薫物草稿2 5紙⁽ⁿ²⁴⁸⁾。懐紙3枚と小型2紙。草稿1と同筆。

写本1, 2は全体の翻刻を与えた。他の3, 4については、処方を書本に1との対応関係を与えた。詳細は次の通りである。

「九條」印については、写本1末尾、2冒頭を^③示す(図1、2)。また写本1末尾の九条幸家の花押を含む奥書を^③図3に掲げる。

九条幸家は豊臣、徳川、本願寺らと良好な関係を築いた。また祖父の九条種通が準備した「返し伝授」により、34歳の時に源氏三ヶ秘決の伝授を受けた。当然、薫物に興味を抱き、家伝を整理したであろう。その結果の一端が今回の写本1、3、4である。

1 薫物相伝次第

奥書によれば、寛永八年(一六三一)八月、従一位九条幸家から新庄越前守、即ち新庄直好(常陸麻生藩)に宛てたものである^③。

一つ書き84条からなり、内部に薫物の処方が39記載される。翻刻においては、一つ書きに1〜84の番号を与える。処方の方には、方1〜方39を付す。その処方の内23方は薫物草稿1に、12方は薫物草稿2に見いだせる。重複を除き、29方が薫物草稿1、2にある。見いだせない薫物には「野風、二葉、長月」など室町期のものが含まれ、古典名の新作も含め、なにか別の控えがあったのだろう。79条の説明に「老父禅閣兼孝」とあり筆者が九条幸家と推される。また末尾に「従一位藤原(花押)」とある。この花押は九条幸家のものである^③。

本写本の翻刻は、武田貴美子(香老舗松栄堂)が行ない、矢野が調整した。なお、方5には転写脱落があると認め、補充した。また79条については、写本2薫物書の冒頭の他本からの補充も参照されたい。

2 薫物書

原本は、外題も内題もない。この序文と冒頭の2方は、薫物相伝次第の79条にあり、「正親町院勅方並序」とされている。その他の処方はか

ならずしも共通しない。また序文は蓬左文庫『焼物調合法』後半序文の中略版のようになっている。そのままでは若干意味が取りにくいところがあるので、翻刻では^③により補った(注1の田中Aから引用)。本書の書写は薫物相伝次第よりかなり下るものと思われる。

3 薫物草稿1

用紙の切れ目で見ると24紙であるが、これを整理した人物は、何枚か適宜貼った紙で取り扱い、右端に十四までの漢数字を記載している。記載される方は、翻刻した「仙人」以外は写本1薫物相伝次第の処方に転写されているので、表1に草稿1の各紙に記載される処方、箇条の対応関係を与え、対応しない説明文の部分は説a〜hと附番した。単純数字は、薫物相伝次第における条文番号である。また、表2には薫物相伝次第の処方の順に薫物の名称を付し、草稿1の対応する紙番号と出現順序を与えた。12は、第一紙の2番目に記載されることを意味する。

第3紙から8紙に繋がる「たき物のくわんらいハほとけよにましますときほさつしやうしゆのちんたんのほひよりはしまりて・」の文は、例えば宮内庁書陵部『香之記』(208―178)の冒頭「薫物ハ仏の御世菩薩聖衆の沈檀の匂ひよりはしまりて・」に照応するが同文ではない。

また、第6紙の方20の末尾には「右合点之分寛永九四中旬令調合了」とあり、それ以前で合点のかかるのは、方14、34、5、11、15、20となっている。そこで、それらについて、表1の草稿1の欄に、14gなどと表記した。実際、薫物相伝次第に転写されたあとで修正を施したと認められる所があり(方36「四五へんも」を「水のすむほと」と変更)、転写した以降にも推敲していたことが判る。

4 薫物草稿2

5紙。懐紙3枚と小型2紙。薫物草稿1と同筆。懐紙は表裏に細かく処方と説が記載されるので6面となり、都合8面に処方等が記載される。表2の草稿2の欄に対応関係を与えた。さらに、薫物相伝次第には現れない13処方を最下部に割り付け、それらは翻刻を与えた。

薫物とその調合、材料

薫物は、沈香、丁子などの香料を細末にして調合し、あまづらなどの粘性物を加えて練り上げ、使用時に加熱して香りを漂わせたり（空薫そらだき）、服や袖口に香りを移すもの（移薫物、薫衣香）である。現在、香炉の直火で焚くことが多いが、香道で伽羅などの沈香を炷く時に、雲母に乗せる場合もある（灰に香りが移るのを嫌う）。実際、薫物でも平安時代に雲母に乗せた形跡はあるが、そもそも雲母を用いることが長く忘れられており、室町時代になって復活した。

薫物は中国起源の調合香が、日本で和風に改変されたが、依然材料は輸入品が殆どであった。その材料についてここでは詳しく述べないが、本来の漢字名、あるいは平仮名を短縮した略号で示すことが多い。参考のために、ここで現れるものを注4に纏めた。なお、貝香（甲香）は、香りを留めるための賦香剤である。へなたりと訓読みもされる。現代では漢方薬や調味料としてのみ知られるものも多い。占唐は当て字であり、以前から既に実態は不明となっており、麝香等の代用品を用いている。

粉にする次第、混ぜる次第など細かく説明されている。混ぜるときは

均一に混ぜるため、大きく広げたままではなく、それを図4に示すように細かい区画に分け、その区画内で良く混ぜるという手法が使われた。

全体を纏めるために、粘性の液体を混ぜる。基本は「あまづら」と呼ばれる、ツタの樹液を煮詰めたものであった。材料のツタはしばしば、「みせんかづら（未煎蔓）」と呼ばれるが、ここでは「にせんかづら」としている（70～76条）。蜜（みつ）も出てきている。鑑真が渡航に失敗した時の、持ち来る予定の品に「石蜜、蔗糖、蜂蜜、甘蔗」などの甘味料がある。八世紀にすでにそれらは到来していた。単に蜜とする場合、石蜜であったと思われるが、59条では「蜜を用いた薫物は香ばしいが、長期間置くと虫が発生する」としている。

薫物には優雅な名が付される。特に、四季に対応させる主要な薫物があり、薫物相伝次第において、四季を明確に付記しているのは次の通りである。春梅花（方1）、夏荷葉（方9）、秋菊花（方14）、冬侍従（方19）、玉椿（方23）、四季・祝言黒方（方31）。黒方（くろほう）は、崑崙からの方、の意味であるともいう。また烏方とも書かれる。

翻刻部

- 変体仮名の「ハ、ニ、ミ」は習慣に従い片仮名を充てる。■は虫損。
- 行替は原本に準じるが、適宜変更している。
- ルビは直後に（ ）で示した。
- 割書は「」で囲みポイントを落とした文字で表示した。
- 原本に句読点はない。それに完全に準拠すると、読み難くなるため、読解の便のために適宜空白を入れる。濁点は本文にあるものを付した。

翻刻1 薫物相伝次第 n258

○薫物草稿1と比較して、方5に【】により語を補った。

○原本では方3の上の一つ書の「一」があるが、送り込み線によって二行後ろの「白梅」の上の空白に誘導されている。よって、「一」はその位置に移動して、白梅を33条とした。

○52条にある図は図4として末尾に配する。紙の上で薫物材料を混ぜるときに、細かく区画して小区画ごとに混ぜる、という伝の説明図。

外題直書 薫物方口伝条々 (上部に「九條」印)

薫物相伝次第

- 1 一はかりのおほそくすへし 馬の尾もちうるなりこれよし
- 2 一甘松并藿香をハ布にてつゝミて 一兩度程あらひ申候也 しけくあらひ申候へハにはひうせ申候也
- 3 一沈香をはわりて朽をハとりてきさみ申候 ほそくわりてきさむなりさてふるひ申候也 又ふるひ残のあらめなるをハ小刀にてよくくきさみなをして又ふるふ也
- 4 一貝香をは先にてむらなくこそけて水にて百度もあらひて水に蜜(ミツ)をませて一夜つけて火をかすかにわして竹のほいろにてうすやうをしきてほりくとするほどあふりてよく候 但あたたまりのある間ハをれす ちとまつさましてみれハをれ申候也
- 5 一粉合候ハぬ以前ハ香具ともを別々にきて 塵ほともたかひに
- 6 一薫物方之事 妙莊嚴院殿御物證云 薫物之方ハ黒方已下四季の方有之 然とも諸方隆有之 兎角指引肝要なり 数度調合候へハ連々切者二成申也云々
- 7 一薬種粉になす次第 沈 白 くんろく かいかう 丁子 或方にハすくなきかうよりまつつくへきとあり
- 8 一かうのかはらんたひことに かなうすきねをよくのこふへし いたたあはせぬさきにハ 香ともよくへちくにおくへし ちりハかりも 香のほひかよひぬれは かをうしなふ也 ちんちやうしハことに中あしきものなり
- 9 一かなうすのくちのへりにかみをたて、きねにゆひつけてすきまなくつくへし けをもらすへからす もろくの香ハたくそのけにあるものなり 風にふかれてかのうする事也 かをちらさてあまつらあわせ越しつれハ花やかなる匂ひあるものなり
- 10 一もろくの香ともふるふときつよくあらしきもいか、又こまかなるはひのことくにてハ にはひ物にと、まらす よきほとにはからふへし
- 11 一梅花はあらく ころはうハこまかなるへし
- 12 一あわする次第 沈 かい しゃ くん ひやく ちやう 梅花 沈 丁 貝 白 甘 薫 麝 侍従 沈 丁 貝 かん うこん
- 13 一ちらしてあわするやう

- はこのふたに地うすやうをしきて そのうへに沈にをく 雉の
はねにてわかちおく これ第一の口伝也
- 14 一よくくあわせて後にあわせふるひ 二たひそうふるひハめこまか
なるすきふくろのるいなるへし
- 15 一合ふるひの後一夜をへて その匂ひたかひにそむをよしとす その
つきの日あまつらにあわすへし これ又ひする口伝なり
- 16 一あまつらあわせの時つきこめて さてちん二分はかりうへにあわす
へし あまつらのかをへたてんやうなり
- 17 一くろほうにはさかういれすくしたるいとかうはし 梅花侍徒にはさ
かうおほかるわろし
- 18 一春ハちやうし秋ハちん冬はくんろく あわせん時にしたかひて
三しゆハかりくはふへし
- 19 一あまつらのあつきハたき物のかをうしなふ よくくさましてあわ
すへし
- 20 一あまつらいられたるによき程なるハ すこしとりて見るに手につかぬ
程にて手のはたのすちつくほとなるをよしとす
- 21 一あまつらいれすくして たき物しるくなりたらハ 火おけの灰に
うすやうをあまたしきて しはしをきたれはかたまるなり
- 22 一冬のとき物は合する時にうるへたれとも 程ふれハかたまるゆへに
こふかにつきてつよくあわすへし
- 23 一夏のとき物はたゝいまかたけれとも 後にうるほひいてくるゆへに
すこし香をあらくつくるへし
- 24 一あはせつきはあらくつくへからす かなうすにきねのあたれは
かなくさくなれば中をつかんとすへし
- 25 一つきて後風にあてすといふ
- 26 一あはせつきの数の事 四両合にハ三千きね
二両合にハ千五百きね 壺両合にハ千きねなり
- 27 一あはせつきして後ハ ちやわんのつほなとにいれて その口を
ふさきて七日すきて後 これをとりいたすひてん
- 28 一梅花はこやくしゆともひとつにして かきひろけてそのうへに
むめのはなをちきり 一りんつゝうへにうつふせてつゝこめたる
よしといふ 梅花はあふしゆくはいの事也
- 29 一あはするころは
二月三月八月九月 あるひは正月の正月の十日頃にあわすへし
- 30 一薫物をたかさるさきにうつしたき物「これハくんゑ香のやうなるもの也」
に入してほひをうめて後にたけハ にほひことにはなはたし
- 31 一たき物のすみには 萩をたきてこにしてふるうて のりにて
まろめて火になしてたくへし 又萩にてなくともたゝのすみかた木
の木にてやきたるをこにして のりにかためたるも又よき物也
- 32 一方1 梅花春 沈四両 丁二両 貝香二分 甘松二朱 麝香二朱
方2 同「梅のかににたるにほひなり」 沈三両 丁一両二分 か
い一両 しゃかう一朱 くんろく一分 白一分
方3 同 ちん二両 かい三分 丁三分 白一朱 薫一朱 甘一朱
麝二朱 青木香一朱
方4 今度御調合梅花 沈五両 丁一両 貝一両 甘二分 麝二分
白檀三分
- 33 一方5 白梅 沈一両 丁二分 かい香一分半 白たん二朱 くんろ
一朱 【かん半朱 うこん半朱 しゃ半朱】

34 一方6 新梅花 沈五両 丁子一両 貝香一両 甘松二分 麝香二分

35 一方7 若草 沈三両 せんたう三分 かい香一両 かんせう三朱

白たん二分 ちやうし一両 くんろく一分 しゃかう一分

方8 同はう 沈三両 占唐三分(代口伝) 貝一両一分 甘三朱

白二分 丁一両 薫六一分 さかう二分

36 一方9 荷葉夏

沈七両二分 甘二分 貝二両二分 丁子二両二分 藿光一分四朱

白一分 鬱金三分 安息香一分

方10 花荷(はなはちす) はすのかに よそへたり

ちん三両三分 かいかう一両 かんせう三朱 白一朱 うこん一

分 くわつかう二朱 丁一分

方11 蓮葉(はちすは) ちん三両 かんせう三分 かいかう一両

一分 白たん一分 うこん一朱 くんろく一分 くわつかう二分

ちやうし一両 さかう一分

37 一方12 盧橘 祝言用之

沈四両 丁子二両 貝香一両 しゃうもつ香一朱 くわつかう一

分 白たん一両 柏一朱くでん しゃかう一分 蘇合油一朱

方13 花荷

沈三両三分 貝二両二分 右此方と一分ノ相違けれ甘三朱

白一朱 うこむ一分 くわつかう二朱 丁一分

38 一方14 菊花秋

沈二両 丁一両 貝三分 薫三朱 甘三朱 麝一分

方15 黄菊(きさく) これをたけハおいをさけ いのちをのふるにほひなり

沈二両 丁二分 かい香一分 くんろく一朱 甘一朱 麝三朱

方16 同

沈二両一分 丁子二分 貝一両一分 鬱金三朱 白二分

蕪合一両三朱 但代ケイシン麝香ナト也

39 一方17 蘭(ふちはかま)

沈四両 丁子二両 かいかう一両 くんろく二分 白一両

麝一分

40 一方18 千種(ちくさ)

沈五両 丁二両 貝香一両 白一両 くん一両 うこん一分

甘二分 麝香二分

41 一方19 侍従 冬用之

沈四両 丁二両 貝三分 甘一分三朱 占唐一分三朱代を用るなり

42 一 香の品々之事

かいかうハおのくの香をよくと、のへ ひやくたんハとをく匂ひ

をとほせ くんろくハおのくの香をよく物にとむる也 然はちん

ちやうし さかう のにほひかんようなる物也

43 一方20 侍従 「秋風す、しくて心にくきおりによそへたり」

沈四両 丁二両 貝一両 甘一分四朱 せんたう一分代さかう一朱

方21 同方

ちん二両二分 ちやうし一両 かい香二分 かんせう三朱

きうこん三朱 さかう三朱

44 一方22 落葉

沈九両 丁四両 貝香一両二分 麝香二分 香附子二分

白檀一分 薫陸一分 蕪合一両

方23 玉椿 冬用之

沈四両 丁二両 甘松二分二朱 貝香一両 薫陸一分 鬱金一分
麝香三朱

方24 野風

沈四両 丁二両 貝二分 白一両 くんろく二分 くわつかう二
分 青木香一朱 かんせう一分 けいしん一朱 さかう一分

方25 二葉

沈一両 青木香一分 貝香二分 甘松一朱 白檀三朱
丁子二朱二分 佳心一種 薫陸二朱 麝香一朱

方26 長月

ちん一両 ちやうし二分 かいかう一分 くんろく二朱
さかう一分

方27 有明

沈五両 丁三両 かいかう一両 くんろく二分 さかう三分
白たん一分一朱

45 一方28 新枕

沈四両 丁二両 貝香一両 くんろく三分 白三分 麝香二分
方29 同

ちん三両 せんたう三分 かい香一両 かんせう三朱 白たん一
分三朱 丁子一両 けいしん一朱 くんろく三朱 さかう一分

方30 同

沈六両 丁二両二分 貝二両三分 白二分 佳心一分一朱(但三
朱少也) 青木香二朱 麝香一分

46 一方31 黒方 「四季通用 祝言の時も用之」

沈四両 丁子二両 貝香一両 薫陸一分 白檀一分 麝香二分

方32 同方

沈一両 丁子二両 くんろく一朱 白たん一朱 かいかう一分
さかう三朱

方33 同

沈四両 丁子一両三分 貝香一両 薫陸三朱 白三朱 麝香一分
方34 今案黒方 号烏丸

沈五両 丁一両 貝一両 白三分 薫三分 麝二分但一両よく候
右貝香 薫陸ハ一分入候よく候

47 かなうすの次第

沈丁 白薫貝 又ハ沈薫貝白丁 此分に候
48 一あらくすれば香あらし いたくこまかなるハみめハよけれとも
たく時ふくれあかり候てかへしの香になる也

49 一はいのことくなるはおとる 匂ひと、まらす あまりにあらきは
いたく煙たちて薫物はやくかはきてわろし

50 一たき物かうはしなからにほひ久しからぬ事あり これハ香とも
あまりにこまかなるゆへなり さる事あらハ間ひをうすくはるへし

51 一梅花ハ花やかにいまめかしう はやき心もちてあわすへき物なれ
ハ ふるひいさ、かあらかるへし ころはうはものふかくおたやか
なるへし おほくハた、こまかなるをよしとす

52 一あわする次第

沈 丁 貝 白 薫 麝 (図4)但口伝あり

53 一貝香 薫陸の類ハは中間(げん)にましふるよし その香さしいて
ぬやうにとの事也

54 一あまつら合の時沈四両合ならハ二分ハかり残しをきて あまつら

- にてつきあわすへき時くわうへし あまつらの香いたさしかため也
- 55 一梅花侍従にはさかうはうの分よりおほきわろし
- 56 一春は丁子 秋は沈 冬ハ薫陸 合する時にしたかひて三朱
はかりくわうへし
- 57 一あまつらいたるによきほとなるハ すこしとりて見るに
手につかぬ程にて 手のはだのすちつくほとなるをよしとす
- 58 一夏の薫物はあまつらすこしせんしすこしたるにあしからす
- 59 一蜜にて合たるたき物こうはしけれども 久しをけハ虫いてくる也
- 60 一ざい合ハ三千六百きねなり
- 61 一きねにハ梅の木よし
私但ふるきを用うるへし うるしくさからぬをとの事也
- 62 一あわせていれ物 ぬりたるかうはこ 或ハちやわんのつほ
ふたをよくして三七日過てとりいたしてたくをよしとす
- 63 一葉しゆとゝのへやう
沈ハ中のかたくちてこになる物あらハ こそけおとしてすつ也
- 64 一丁子ハ花をとりてきさみこになす
- 65 一麝香はいつはるものおほし まことなる物すくなし かうく
にかきをほんどす 火にやくに久しくわきかえるハよし
- 66 一じゆくうこん むらさぎの色してくちたるやうにて
かうはしきなり
- 67 一きうこんハ まろたちて すろのミの色なり
- 68 一くわつかうハ 葉くきを用る
- 69 一そかうありかたき物なり むらさき色にして又赤色也
もろくゝの香をせんしあわせたる物也
- 70 一 あまづら口伝
にせんかづらを六七寸にきりて ゆいたばねてきりくちを
上と下になしてつりをきて うへのかたを火にてやきてすて
やかぬかたをしたへつりさげて さてしたにちやわんにても
をきて そのしるのいつるをうけて ちやわんにひとつしるあらハ
半分にねりへらして すくしにてこしてつかう事也
- 71 一このにせんかつらをにるとき すこしあわたつことあるをは
それをミつのごとくにあわたつをとりすつるなり
- 72 一はしめねらぬさきには しるの色ハ蒲萄のやうに水のごとくに
して白をねりぬれは少色つく事なり
- 73 一此しるしほりて一両日の間ハにはほぬ事也 二三日も程へ
ぬれはことの外わるくさき也 されとも薫物に合ては
くるしからすよき也云々
- 74 一扱此にせんかつらのにほひのわるくさき事ハ たとへハ歯につくる
かねのごとくにあれとも 調査するに努力不告也
- 75 一此にせんかつらハ伊豫の国などには 公事物に桶ひとつ
ほといたすなり つるのふときほとよき也
- 76 一にせんかつらの葉は蘿のやうなる物なり 此蘿をきりそれを
なめて見れハあまきもの也 山中大木などにはいまつ
はりてあるへきなりまれなるものなり
- 77 一方35うつしたき物の方
沈一両二分 丁子三分 白たん一分 山たち花三朱ほたんひ
くわつかう二分 うこん二分 かんせう一両
せんこ二分代にハさかうのへそのかわを用也

この八色の物をいさゝかあらくこにして あわせてねりたる
きぬのふくろに入れて もらぬやうにして香を入へし

三七日すきてかうをとりいたして 又そとつきて

よきさけをそゝきてあわせて もとのやうにして入おさめよ

78 二方36 くへの香の方

かんせう三両 くわつかう二両 ちやうし三分 もつかう一分

白たん二分 くんろく二分 ちん二両 以上七色也

右やくしゆとゝのへやうハかんせうハすみたるさけにひたして

しほりあけてかけほし くわつかうハきぬにつゝみて

白水にて四五へんもあらひ のちに火にそとあふる

此外ハいつれもくきさみこになしてふくろにいるゝなり

方37 又同方

沈一両 丁子二両半朱 くわつかう一両 甘松一両 白たん二分

たうき二分 しゃうもつかう二分 うぬきやう三朱 「そといりて

上かわをのくるなり」

方38 同方 花たちはな

沈一両二分 丁子三分 白一分 山たち花ほとんどの事也

くわつかう三分うこむ二分甘松一両 せん唐二分代さかうのかわ

八色の物をあらくふるひて あわせてねりたるきぬの

袋に入れてもらぬやうにこしらへて 三七日すきてかうを

とりいたしてそとつきて よき酒をそゝきてもとの

やうにしてをくへし

方39 同方

沈一両 丁子二両 藿香一両 甘松一両 せんたう 青木香

いつれも二分 白たん又二分

甘松ハよき酒にひたしてしほりあけてかけほし くわつかうハ

きぬにつゝみて白水にて水のすみほとあらひて これも

かけほし 此外ハ何もこになし候

79 一 正親町院勅方并序

薫物はそのね一よりおこりてその花四季にかた

とれり 春の鶯梅花枝にさへつり 夏の蛙の蓮の

葉の下になき 菊花のうつろひやすき事を

思ひ 落葉のつねなき世をしらしめたり しかあるを

方につたへ 香をあはするに 家ゝの説あまたあり

あふけはたかくきれハかたし 今桂林に入て一の

枝をおるになぞらへて わつかにこれをしるしいたす

方40 黒方 四季 祝言に用候

沈五両大 丁二両小 白一両 薫一両小 貝一両大

麝二分

方41 新枕 面白にほひにて

沈四両おもく 丁二両 貝二分 白一両からく 薫一両からく

藿二分 青木香一朱 甘一分 桂心一朱からく

麝一分 鬱金一朱

この勅筆に今家門所持にて候をうつして

かきつけ候 又この次にしるし侍る つけほしの

方ハ亡母東陽院殿つねに手なれ給し

にて候ほとに ミつからもおりくハむかしの

御名残のわすれられ侍ぬまゝ、あはせなれ

たるを世にことなるい応望ゆへもたし

かたく又ハ右のもろくの方とも家々のならひ

老父禅閣兼孝公よりうけたまはり及び

たるとをりいさ、かも残さす口伝もミナ

つたへたるうへはと 人のあさけりをも

かへりみずしるしいたす

80 一 薫物にしほいる、口伝

しほをきぬにて包て かなうすをそとのこふなり

すこしにてもしほ入れハ あをくさくなりてあしき

ものなり

81 一 薫物になへすみにて色付事

かわらけにても焼に そのなへすミのうちへも猶をきを

入て そとから又じやうになるほとやきて さてきぬにて

ふるう事にて候なり

82 一 貝香こしらへやうの事 ミつを水にてうすくときて

一時も二時も水につけて さてうすやうにてあふる也 其後

をろしてふるうなり

83 一 かうくはさし出たる物から合する事也

84 一 いつれの方にもさいくにあはせて 粉合してまつ

こ、ろミによくき、て見候へハ をのつからにほひ

はなやかにして上手にもなるよしにて候

寛永八年辛未仲秋上旬従一位藤原(花押。九条幸家)

新庄越前守

(下部に「九條」印。図1)

翻刻2 九条家薫物書 黄紙本一卷 n257

○麝香 は 广 と記されるが、ここではすべて 麝 とした。

○原文は処方の香が一行二件であるが、ここでは追い込んだ。

○序文は、蓬左文庫「焼物調合法」後半序文の中略となっている。【

1の田中A) p.337の表、p.350注(2)などを参照されたい。】

(上部に「九條」印。図2)

たき物は其ね一よりおこりて その花四季にかたとれり 春の鶯梅花枝にさへつり 夏の蛙の蓮の葉の下になき 菊花のうつろひやすき事を思ひ 落葉のつねなき世をしらしめたり【・・しめ ふりにし袖のほひを きえにし人のおもかけをうつす これらの術はみなたきものをなかたちとせり さればめにみぬをに 神もこれを感じ いはんや人倫の物に化せるをや】しかあるを方につたへ 香をあはするに 家々の説あまた有 あふけは【月日よりもなを】たかく きれは【金石よりも】かたし 今桂林に入て一の枝をおるになぞらたり わつかにこれをしるしいたす

方1 黒方

沈五両大 丁二両小 白一両 薫一両小 貝一両大 麝二分

方2 新枕

沈四両おもく 丁二両 貝二分 白一両かろく 薫一両かろく

藿二分 青木香一朱 甘一分 桂心一朱かろく 麝一分 麝金一朱

方3 梅花

沈四両 丁二両 貝二分 甘二朱 麝一朱

方4 又方

沈二両二朱 丁二両二分 貝三分 甘一朱 白一朱 薫一朱 麝三朱

方5 菊花

沈二両 丁二分 貝二分 薫二朱 甘二朱 麝三朱

方6 仙人

沈一両 丁二分 貝一分 白一朱 薫一朱 甘一朱

方7 烏方

沈三両 丁一両三分 貝一両一分 薫二分 白一分 麝二分

方8 侍従

沈四両 丁二両 貝一両 麝一両 甘二分 麝一分

方9 白梅

沈一両 丁三朱 白一朱 麝一朱 藿朱中 甘一朱ノ中

方10 遅桜

沈一両 丁一分一朱 貝一分二朱 白一朱ノ中

方11 花橘

沈二両 丁一両 貝三分 白一分 薫二朱 麝一朱 甘一朱 麝一分

翻刻3 薫物書草稿1 一卷 から抄出 3紙が本来の冒頭

説a (3紙) (「九條」印) たき物のくわんらいハ ほとけよにまします
とき ほさつしやうしゆのちんたんのほひにハしまりて からのくに
にもまなひうつせり わかくに、つたわるものハ あめのみかとの御よ
にとはしかりしに よのかたいへくにもてあそひわあわせける しか
れともかつの御まろくにかわりていまのよにも そのほうおもひく
にさまくなれとも つねにあわせもちゆるハ六くさなり

(8紙) はいくわ かよう きつくわ らくよう くらほう ししゆう
なり はいくわハむめのかににたり かようハはすのはなのかにかよへ
り きつくわハきくのはなのかにに候なり らくようハふゆふかく物さ
ひしくあはれなるよそほひ候 たく志これミなあめつちのあいたの 五
きやうにさうしやのように からわるたくりなり さうもくハさうこく
なれハ かつミなどのほひの なつかしくひつましきハ ほさつしや
うしゆのとりなへにかうはしく候 みねほひそかし これをちほくた
きぬれハ あしきものされよき事きたり ふくともつ候 かなおあんな
り

仙人 (7紙)

やま入 ちん二両 ちやうし三分 かいかう二分 ひやくたん一分
ちやうかうひ二しゆ くんろく一しゆ さかう三しゆ

翻刻4 薫物書草稿2 懐紙三紙表裏、内二紙から抄出

第一(第一紙表)

- 1 はいくわ
ちん四両 かい二分 ちやう二両 かん二しゆ さ二しゆ
- 2 おなし
ちん四両 ちやう一両一分 かん一分 かい一両二分 さ一分
ひやく二しゆ

第二(第一紙裏)

- 3 又はいくわ
ちん四両 ちやう二両 かい二分 かん二しゆ しゃ二しゆ
- 4 又おなじほう
ちん四両 かい二分 ちやう二両 かん二しゆ さ二しゆ
- 5 又ほう ころほう
ちん四両 ちやう一両三分 かい一両二分 くん一分 ひやく一分
さ二分

第三(第二紙表)

- 6 ころほう 四き しょうけんにもちゐ候
ちん五両大 ちやう二両小 ひやく一両 くん一両小 かい一両大
しゃ二分
- 7 又おなじほう 四きつうよう しょうけんのときこれをもちゆ
ちん四両 ちやう二両 かい一両 くん一分 ひやく一分 しゃ二分

8 ころほう 一さい

- ちん八両 ちやう三両 かい一両二分 ひやく二分 くん二分
しゃ一両
おなじほう はんさい

- 9 ちん六両 ちやう二両一分 かい一両二しゆ ひやく一分二しゆ
くん一分二しゆ しゃ一分二しゆ

- 10 おなじほう 二はんさい
ちん四両 ちやう一両一分 かい三分 ひやく一分 くん一分
しゃ二分

- 11 ころほう きんた、
ちん二両 ちやう三分 ひやく二す かい一分三す しゃ一すはん
くん二す

- 12 おなじほう
ちん二両 ちやう一両 ひやく二す かい二分 しゃ一分 くん二す
- 13 第四(第二紙裏) 重複分もすべて翻刻する。三条公敦の方が基本か。
今案黒方 号烏方 付紙ノ分

- 14 沈五両 丁一両 貝一両 白檀三分 薫三分 麝二分 以上貝香
薫陸一分入てよく御座候
今度御調合梅花 付紙ノ分

- 15 沈五両 丁一両 貝一両 甘二分 麝二分 白檀三分
千種 付紙ノ分
沈五両 丁二両 貝一両 白檀一両 薫一両 うこん一両 甘二分
麝二分

16 若草 付紙ノ分

沈五両 占唐三分 貝一両三分 甘三朱 白一分 丁一両 薫三朱 麝一両

17 有明 付紙ノ分 但有明 一方ハ大覚寺殿相伝

沈五両 丁香三両 貝二分 薫二分 麝一両 白檀二分二朱 貝香 薫陸 一分可然候 いつれの方此二色此分にて御座候

謝 辞

写本群の調査にご協力いただき、松寿文庫管理者として翻刻と画像掲載を許可された、香老舗松栄堂社長、畑正高氏に深謝申し上げます。そして薫物相伝次第を翻刻された武田久美子氏に感謝する。図5は、宮内庁書陵部に掲載許可いただいた。さらに、極めて親切な御指摘を頂いた査読者に御礼申しあげたい。

註

(1) 田中A 田中圭子『薫集類抄の研究』三弥井書店二〇二二

薫集類抄と、薫物文献五つの翻刻問題がある。蓬左文庫「香之書」「焼物調合法」、武田杏雨書屋「香秘書」、宮内庁書陵部「薫物方」、専修大学菊亭文庫「薫物故事」。また「主要参考文献等目録」に、薫物関連論説が整理されている。

田中B 田中圭子『薫物書の研究』第一〜五号、二〇一四〜一九。

一号 徳川林政史研究所「薫物之方」二〇一四

二号 京都大学菊亭文庫「薫物秘蔵抄」二〇一五

三号 京都大学菊亭文庫「江戸下向雑々覚」二〇一六

四号 専修大学菊亭文庫「万方」、「香具撰様調様」二〇一八

五号 陽明文庫「焼物之方」。附「薫物調合秘方」解説二〇一九

広島女学院大学のレポジトリに登録されている。

<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hju/list/nitypes/Others/%E8%96%AB%E7%89%A9%E6%9B%B8%E3%81%AE%E7%A0%94%E7%A9%B6>

(2) 九条幸家(ゆきいえ)。五撰家九条家。九条兼孝(寛永十三年没)の子。天正十四年(一五八六)二月十九日〜寛文五年(一六六五)八月廿一日。慶長十九年(一六一四)に従一位。写本1の奥書年紀は「寛永八年八月」であり、「幸家」となるのは同年閏十月であるから、未だ「忠栄」と名乗っていた時期であるが、本論説は幸家で統一する。

新庄直好。従五位新庄越前守、常陸麻生藩。慶長四年(一五九九)〜寛文二年(一六六二)七月廿二日。元和四年(一六一八)家督相続。

(3) 図3の花押は、例えば宮内庁図書寮九条家文書九・5291の九条幸家(忠栄)自筆本「覚書」のものと一致する。図5参照。図1, 2の印は九条家印として著名。

<https://shoryobukunaicho.go.jp/Toshoryo/Viewer/1000724060000/e365c6acdd34b0b9a5072c3dd1aa931>

(4) 薫物材料の、漢字名、仮名。

沈香 ちんかう 沈、ちん。丁子 ちやうし 丁、ちやう。

白檀 ひやくたん 白、ひやく。薫陸 くんろく 薫、くん。

貝香(甲香) かいかう(かふかう) 貝(甲)、かい。

表2 草稿1, 2と方の対応

薫物	次第	草稿1	草稿2	備考
梅花	方1	1.2	2, 4	春
	方2		1, 2	
	方3		1, 2	
	方4		2, 4, 6	今度御調合
白梅	方5	4.4	2	要補充
新梅花	方6	4.5	2	
若草	方7	5.1		
	方8			
荷葉	方9	1.3		夏
花荷	方10			はなはちす
蓮葉	方11	5.2		
盧橘	方12			祝言用之
花荷	方13			方10と一分異
菊花	方14	1.4		秋
黄菊	方15	5.4		
蘭	方17	5.3		
千草	方18		4, 6	但し小異
侍従	方19	1.5		冬
	方20	6.2		
	方21	6.3		
	方22	6.4		
落葉	方22	6.4		
玉椿	方23	6.1		冬用之
野風	方24			
二葉	方25			
長月	方26			
有明	方27		4	但し小異
新枕	方28			
	方29			
	方30	2		
	方31	1.1	3	四季 祝言
黒方	方32	4.1	3	
	方33	4.2	3	
	方34	4.3	2,4,6,7	今案黒方 烏方
	方35	21.1		
移薫物	方36	21.2		転写後修正有
	方37	23		
	方38			
	方39	24		
仙人		7		やまびと
梅花			1, 5	2件
			2	2件 (重複1)
黒方			2	1件
			3	7件
若草			4, 6	1件

表1 草稿1の構造

草稿1	相伝次第	薫物
1	方31	黒方
	方1	梅花
	方9	荷葉
	方14	菊花
14g	方19	侍従
		42 貝香
2	方30	新枕
	3	説a1 (九條印)
4		42
	方32~34	黒方
34g	方5	白梅
	方6	新梅花
5g	方7	若草
	方11	蓮葉
11g	方17	蘭
	方15	黄菊
15g	方23	玉椿
	方20,21	侍従
20g	方22	落葉
	方仙人	仙人
8	説a2	
	9	63~68
10	説b1	
	説b2	
11		1, 7
	説c	
12		8, 9
	説d	9
13		10, 50
		11, 51
14		51
		29, 13
15	説e1	
	説e2	
16	説f1	
		12
17		12
	説f2	
18		8, 17, 28
	説g1	
19	説g2	
		20~23, 58
20		58
	説h	
21		24~27, 30
	方35	移薫物
22		31
	方36	薫衣香
23		78
	方37	薫衣香
24	方39	薫衣香

麝香 さかう、麝、尸。甘松 かんせう 甘、かん。
 鬱金(鬱金) うこん、鬱(鬱)、(熟鬱金、黄鬱金等も)。
 占唐(簷糖) せんたう。霍香 くわつかう、霍。桂皮 けいひ。
 (大) 茴香 うみきやう。靈陵 れいりやう。龍涎香 れうせんかう。
 蘇合 そかう。香附子 かうふし。桂心 けいしん。木香 もつかう。
 青木香 しゃうもつかう。当帰 たうき。安息香 あんそくかう。
 方21・67の きうこんは、黄鬱金である。また、青木香はしばしば「あお
 もっこう・せいぼくかう」ともされるが、「ししょうもっこう」が正しい。

図1 薫物相伝次第末尾「九條」印

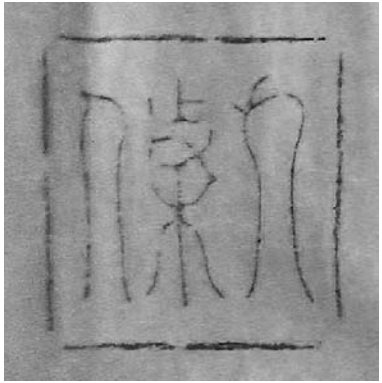


図3 薫物相伝次第 奥書花押

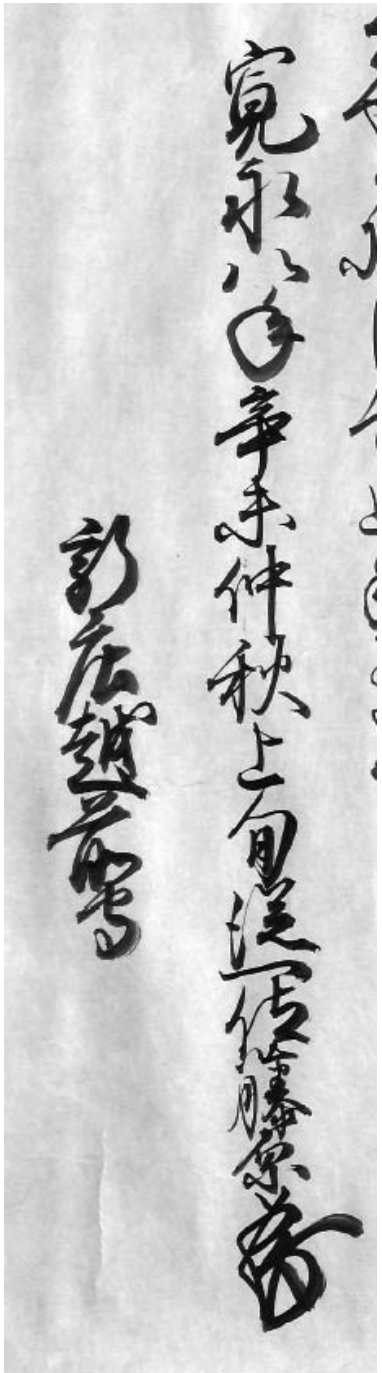


図2 薫物書 冒頭

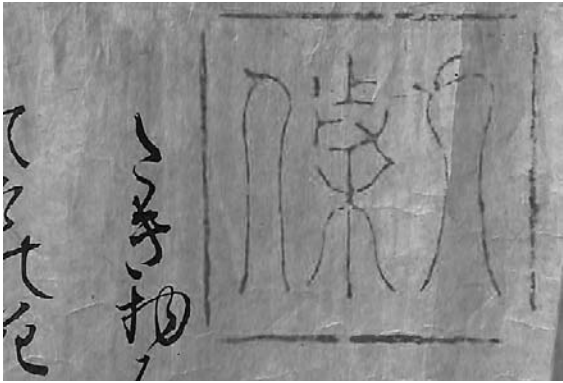


図5 九条幸家の花押。注3参照

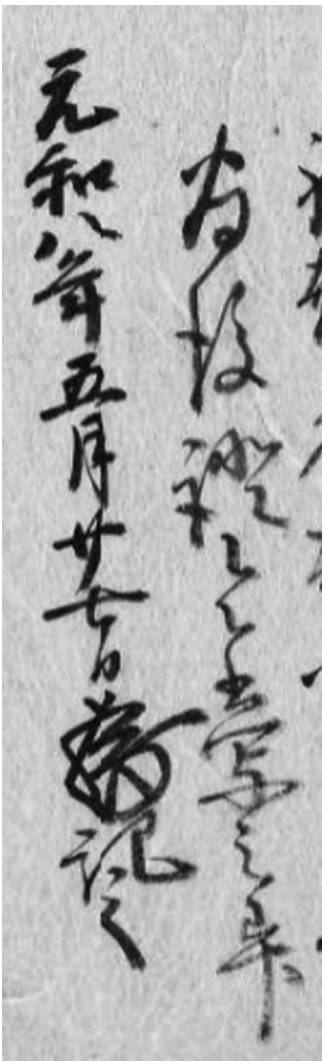


図4 混せる格子

